

04 環境分析ネットワーク

発表者： 富田 夏鈴・野沢 歩生・山崎 愛弓（生命環境学部環境科学科3年）

担当教員： 風間 ふたば（生命環境学部環境科学科）

取組みの概要

人々が暮らしている「里の風景」とは、そこに住んでいた人々が、自分たちの暮らしの基盤を作るために、時代に応じた方法で自然と対峙し、自然と共存できる方法を探して作り上げられて来たものである。その「里の風景」が今の人々の心を和ませているが、この「美しい里」を維持してゆくには、人と自然の共生の歴史や現在の実態をよく理解しておく必要があり、その上で、次世代につなげる活動を考える必要がある。環境分析ネットワークは、このような観点から、山梨県内の水辺環境を中心に授業内容が組み立てられてきた。今年度は、これまでの授業を振り返るとともに、環境保全に関する市民活動の実態を知る目的で、全国組織である日本環境教育フォーラム主催の「清里ミーティング2019」にも参加し、参加者との意見交換を行った。

1.山梨県の河川環境

山梨県内の河川環境の実態を理解するために、公表されているデータのを基に、課題を考えた。水質については以下のデータを参考にして概要の把握に努めた。

- 山梨県 公共用水域及び地下水の水質測定結果(常時監視)【1973年(昭和48年)から現在までのデータがある】
<https://www.pref.yamanashi.jp/taiki-sui/sokutei.html>
- Yamanashimizuネット 身近な川の一斉調査 データベース 【2004年(平成16年)から現在までの市民による水質調査結果のデータがある】
http://www.ymizunet.org/mizuNet/modules/mizuDB2/info_mizudb2.php

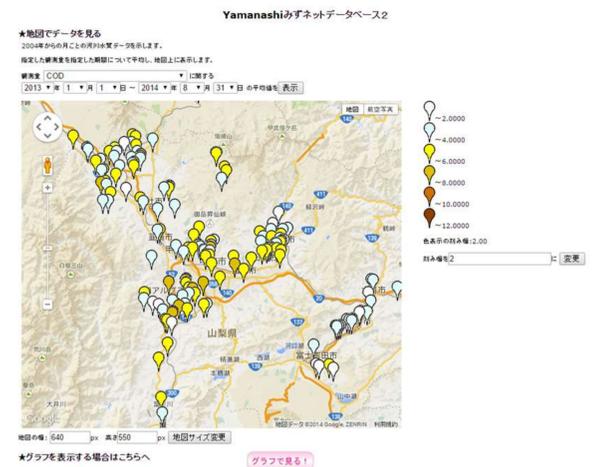


図1 市民が集めた水質データの例(Yamanashimizuネット)

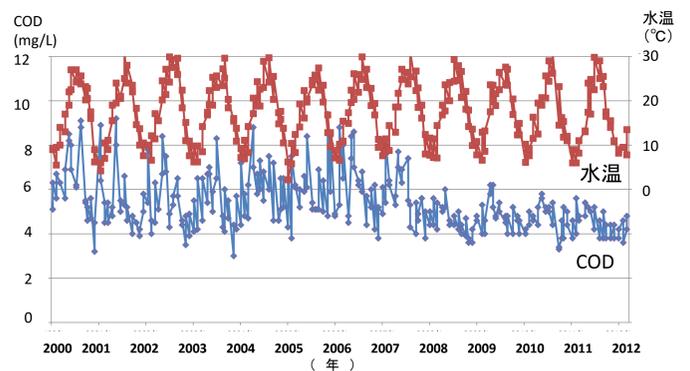


図2 濁川橋(濁川)の水温とCODの経年変化

山梨県内の河川水質は、特に都市部を中心に、きれいになった。図2は常に県内河川水質ではワースト1を記録してきた濁川(濁川橋)の結果である。2008年を境に、主として冬に見られた高いCOD値が、出現しなくなり、また平均値も低下傾向にある。

高いCOD値が出現しなくなった時期に、この流域に下水道が普及した。水質の改善に下水道の効果が大きかったことが分かる。

一方、水温とCODの値との関係をよく見ると、2008年からは水温が高い夏にCOD値も高くなり、両者の関係はそれ以前とは逆の傾向がある。

生物活動が活発な夏にCOD値が高いのは上流域の河川ではみられていた現象である。河川に下水などの汚水が流入しなくなると、河川本来の季節による水質変動が現れてきたと考えられる。



このように水の汚れという視点から河川を見ると、県内の河川環境は改善されてきたが、最近プラスチックごみの問題が指摘されるようになってきた。これは自分たち一人一人が、その気になれば解決できる課題である。

2.市民活動の必要性

今回参加した「清里ミーティング」(<https://jeef.or.jp/activities/kiyosato/>)は、環境教育に関心のある人たちの交流の場として、毎年、自然学校等の環境団体、企業、行政、教育機関等から約200名の関係者が参加している集まりである。この年は、SDGsの理解と実践についての話題が多かった。環境の理解のために、多くの人々に自然に触れる体験を提供することや、体験によって参加者自身が課題を見つけること(環境教育)の重要性を改めて感じた経験だった。

